

令和 5 年 5 月 14 日現在

機関番号：22604
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2020～2022
課題番号：20K01450
研究課題名(和文) ジャーナリズムの中の共和国：革命期イングランドにおける共和主義の動態に関する研究

研究課題名(英文) Republics in the World of Journalism: A Study on Republican Movements in the English Revolution

研究代表者
大澤 麦 (Osawa, Mugi)
東京都立大学・法学政治学研究科・教授

研究者番号：30306378
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、17世紀中葉の革命期イングランドにおいて発行された広報誌あるいはニュース誌と呼ばれる活字媒体を分析することにより、同時代における共和主義思想の特質と動態を明らかにすることにあった。研究の結果、従来基本的に異なる政治運動と考えられてきた1640年代のレヴェラーズに代表される急進派と1650年代の国王空位期に現れる共和派(コモンウェルス=メン)とが、共和国をめぐる構想において密接なつながりをもっていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は17世紀中葉の革命期イングランドの共和主義思想の研究であるが、古典的著作の読解という伝統的な方法ではなく、広報誌あるいはニュース誌と呼ばれた新しい形態のニュース媒体(今日の新聞の原型)の分析という手法をとったところに特色がある。この方法により刻一刻と変化する政治情勢のなかで共和主義の理念が実践のなかでいかに形成され、機能したかを探ることが可能になった。その結果、革命全体を貫く共和主義を含めた急進主義政治思想の流れを、かつてない明瞭さで把握することができた。

研究成果の概要(英文)：This research has attempted to elucidate the characteristics of republican movements in Revolutionary England in the mid-seventeenth century, by analyzing several newsbooks issued during that period. It has been found out in this study that radicals of the 1640s, as typified by the Levellers, and Commonwealth-men of the 1650s who appeared in the Interregnum can be viewed as closely linked in concepts of republic, despite many previous studies' assumption that they were basically distinct political movements from each other.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：共和主義 ジャーナリズム メディア史 イギリス革命 新聞 レヴェラーズ ニーダム 急進主義

1. 研究開始当初の背景

17世紀中葉の革命期イングランドはJ・G・A・ポーコックの『マキアヴェリアン・モーメント』(The Machiavellian Moment)によって大西洋圏の共和主義思想発展の起点に位置づけられて以来、多くの共和主義研究者の関心事であり続けている。しかし近年この見方に反して、イングランド共和主義の源泉を革命期ではなく、「王のいる共和国」(monarchical republic)としての16世紀エリザベス朝に求める研究が精力的に遂行されている。それが強調するのは、イングランドではルネサンス期以降に古典的共和主義思想の受容が始まっており、これとの関連でエリザベスの時代には王国を共通善の保たれた良き政治的共同体という意味で‘commonwealth’や‘republic’とみなす思想がすでに存在していたという点である。また同時に、共和主義の伝統をさらに遡って、アングロ=サクソン王国時代以来の「古来の国制」に求める見解も出され、大きな注目を集めている。ここで重要なのは、これらの見方が共和主義研究を超えて、革命期の急進主義政治思想一般に対する新しい研究動向の拠り所になっていることである。従来、革命期の急進主義は「古来の国制」(ゴシック政体)との断絶を志向する思想として探求されるのが一般的であった。しかるに、この新しい捉え方はそれを「古来の国制」の枠組みのなかでの革新として理解しようとするのである。しかし、この見方は1649~1660年に紛れもなく存在した「王なき政体」(kingless polity)としてのイングランド共和国の意味を著しく曖昧にするばかりか、その時期に過熱化していた政体の改変の是非にかかわる議論を等閑視することにつながる。共和制が王制の対極をなす概念として一般的に認識されていた以上、イングランド共和国の体制原理と共和主義との関係を問うことは依然として重要な課題たり続けているはずである。

2. 研究の目的

上に述べた学術的背景のもと、本研究は革命期イングランド、わけても1640年代末期の共和国樹立期から1650年代にかけての共和主義思想の分析を行うことを目的とした。その際に重視したのが、共和主義の動態、すなわちその理念がどのように同時代の現実の中で働いたかという点であった。本研究では、それを解明するために、革命期に発達したジャーナリズム、とりわけニュースブック(newsbook 広報誌あるいはニュース誌)と呼ばれる新しい形態のニュース媒体の果たした政治的機能に着目した。これら进行分析することによって、1640年代の急進派と1650年代の共和派との関係を共和主義思想の展開過程のなかで突き止め、この時代の共和主義の動向をかつてない明瞭さで把握することが本研究の具体的な課題であった。

3. 研究の方法

本研究は以下の(1)(2)の方法で遂行された。

(1)本研究は研究期間全体を通じて、17世紀イギリス史や政治思想に関わる一次資料や研究文献、わけても前項で述べたニュースブックを丹念に読み進めて、これら进行分析するという方法で遂行された。一次資料については、主に*Early English books, 1641-1700*のオンライン版およびマイクロフィルム・コレクションの*Early English Newspapers, Woodbridge, Conn.: Research Publications, 1978*に収録されたものを使用した。また、一次資料の書誌情報については、以下の文献を利用した。

() Carolyn Nelson and Matthew Seccombe, eds., *British Newspapers and Periodicals: A Short Title Catalogue of Serials Printed in England, Scotland, Ireland, and British America*, Modern Language Association of America, 1987.

() J. B. Williams, *A History of English Journalism to the Foundation of the Gazette*, Longmans, Green, and Co., 1908.

() J. Frank, *The Beginnings of the English Newspaper; 1620-1660*, Harvard U. P., 1961.

() Joad Raymond, *The Invention of the Newspaper: English Newsbooks 1641-1649*, Oxford U. P., 1996.

() Nicholas Brownlees, *The Language of Periodical News in Seventeenth-Century England*, Cambridge Scholars Publishing, 2011.

このほか不足分については、イギリスの大英図書館とオックスフォード大学ボードリアン図書館での資料調査によって、これを補った。

(2)本研究を遂行するにあたっては、各種学会を通じての関連諸分野の研究者との意見交換も大変重要であった。とくに、政治思想学会、日本政治学会、日本ピューリタニズム学会の各研究大会、定例研究会等での研究報告や意見交換は本研究を遂行していくうえで有意義であった。

4. 研究成果

メディア史における革命期イングランドの重要な貢献のひとつは、後の新聞の原型となった数々のニュースブックを生み出したことである。本研究は、この新種のニュース媒体のなかに現れた共和国の理念を分析することによって、今日の公共性の概念の中核を形成するに寄与した同時代の共和主義思想の特質と動態を明らかにした。以下、王制期と共和制期に分けて本研究の分析の中身を叙述したうえで、最後に全体を総括し、これによって本研究の成果報告としたい。

(1) 王制期

ニュースブックが出現する以前は、コラント (coranto) と呼ばれた一枚紙 (broad sheet) の新聞 (ニュースレター) による外国事情を中心にした報道がイギリスにおけるニュースの一般的な形態であった。ニュースブックは1642年の第一次内戦勃発後、革命の諸勢力間の政治・宗教論争を象徴する活字文化であるパンフレットと国内外のニュース報道とが結びついて誕生した新しい活字媒体として登場した。その飛躍的な発行数の増大の背景には、内戦後の複雑な政治的利害の対立が刻一刻と変わる政治情勢への関心を高めるとともに、各々の勢力の主義主張を国民に訴えるプロパガンダ戦略の必要性を増大させたことがあった。当初の論戦をリードしたのはジョン・バーケンヘッド編集 (執筆) の国王派のニュースブック『メルクリウス・アウリクス』(Mercurius Aulicus) とトマス・オードリ (後にはマーチャモント・ニーダム) 編集 (執筆) の議会派のニュースブック『メルクリウス・ブリタニクス』(Mercurius Britannicus) であった。第一次内戦が議会軍の勝利に終わり、国王が捕虜になると、ジャーナリズムにおいても議会派が優勢になり、() 『パーフェクト・ダイアーナル』(A Perfect Diurnall of Some Passages in Parliament)、() 『キングダム・ウィークリー・インテリジェンサー』(The Kingdoms Weekly Intelligencer)、() 『パーフェクト・アカーランシズ』(Perfect Occurrences)、() 『パーフェクト・ウィークリー・アカウント』(The Perfect Weekly Account)、() 『モデレート・インテリジェンサー』(The Moderate Intelligencer) の議会派有力5誌がひしめくことになった。その後の1648年5月に開始された第二次内戦は、王制の廃止すなわち共和政体樹立を重要な選択肢のひとつとして浮上させた。この文脈においてジョン・ディリングム編集 (執筆) の上記 () 『モデレート・インテリジェンサー』は何者かの手によって、より急進的な論調への改変が企てられた。その「企て」は最終的には『モデレート』(The Moderate) という名称の新たなニュースブックを生むことになったのであった。

『モデレート』の論説には自然法思想、生得権理論、人民主権、ノルマンの軛説、コモン・ロイヤル批判等々、1640年代を代表する急進派レヴェラーズの典型的な政治理念が現れることから、長い間彼らの機関紙とみなされる研究史があった。だが近年では、国王裁判・処刑に関する立場や新生・共和国の有権者資格についての考え方の観点から、むしろ同誌を、レヴェラーズを弾圧する側に回ったニューモデル軍の立場を代弁するものと捉えることが一般的になっている。しかるに本研究は、上記の諸理念を前提に構想された成文憲法によって王制廃止後の共和国を基礎づけるプランにレヴェラーズ運動の本質を見出し、それを終始後押ししたメディアとしての『モデレート』理解を提示することによって、同誌をレヴェラーズのニュースブックとして再定立した。同時に、それが1640年代に出現した数多の急進的ニュースブックのなかにあって類を見ない構想であったことを本研究は明らかにした。この点の詳細は次項5の「主な発表論文等」欄に掲げた「ニュース誌『モデレート』(1648~9年)と革命期イングランドの急進主義政治思想」で論じたところである。

(2) 共和制期

1648年12月、軍はクーデタにより議会で多数派を形成していた保守勢力 (長老派) を追放すると、協賛者である議会の独立派とともに、国王処刑から共和制樹立への道を突き進んだ。こうした措置に厳しい批判を試みたレヴェラーズの指導者たちは投獄されるが、『モデレート』は廃刊に追い込まれる1649年9月まで終始一貫して彼らを支援し続けた。しかし、そうしたなか、新生・共和国政府は1650年6月に自らの政治体制の正当性を国民に訴えるために週刊のニュースブック (広報誌) 『メリクリウス・ポリティクス』(Mercurius Politicus) を発行する。以後、1650年代のジャーナリズムは同誌を中心に展開されることになった。この編集にあたったのがふたりの政府広報官、すなわち『失樂園』の詩人として名高いジョン・ミルトンと敏腕ジャーナリストとして名を馳せたマーチャモント・ニーダムであった。両名は同誌刊行前からすでに共和国政府を擁護する書物を出版していた。このうちミルトンの『国王と為政者の在位権』が『モデレート』(レヴェラーズ) と同一線上の人民主権 = 信託理論に基づく抵抗権を骨子にしていたのに対し、ニーダムの『イングランド共和国の主張』は権力の正当性を剣の力に求めるデ・ファクト論を基調にしていた。ここで重要なのは、ニーダムの著書の要点が1650年9月の第16号から約1年間に発行された『メリクリウス・ポリティクス』の各号の論説に掲載されたことである。さらに、1651年9月の第68号から1652年8月の第113号に掲載された同誌の論説には、古典古代の都市国家の共和政体の秀逸性、とりわけリウィウス『ローマ建国以来の歴史』に見出される共和制ローマの卓越性が、派閥 (党派) による国の分裂を不可避免的に伴う世襲王制の腐敗との対比において、力説された。この古典的共和主義は『モデレート』やレヴェラーズには見られなかった、共和制イングランドに特徴的な政治思想であった。そして、論説のこの部分を執筆したニーダムは、1656年、王制への傾斜を強めたクロムウェルの護国

卿体制への批判を意図して、『「自由な国家」の卓越性』という書名の単行本として、これを再編集して出版するのであった。

この時期に見られた上述の 人民主権 = 信託 (契約) 理論に基づいた抵抗権論、 デ・ファクト理論、 古典的共和主義の三者は、王制から共和制への国制の変革という営為において、それぞれ別の機能と役割を果たしていた。しかし、国王処刑を の信託理論による人民の抵抗権によって、軍事クーデタによる議会の粛清と共和制の樹立を のデ・ファクト理論によって、そして樹立された共和政体の秀逸性を の古典的共和主義によって正当化しようとした新生・共和国政府であったが、この3つの理論の整合性を明瞭に説明できないことは広報官ニードム自身も自覚するところであった。とりわけ、 の軍事クーデタという暴力的起源をもつ共和国が、なぜに言う人民の信託 (同意) を得たと説明できるのか、全く不明であった。このことは、レヴェラーズを切り捨てて成立した共和制イングランドが、自らの正当性をレヴェラーズの信託 (契約) 理論に基づいた成文憲法という手続きなしに説明できなかったことを、当該政権の中樞が認めていたことを意味した。揺籃期から安定期への移行を目指す共和制政府にとって、抵抗権論やデ・ファクト理論に依存することは、自らの起源の暴力性を自認し露呈することになるゆえに決して望ましいことではなかった。こうして、『メルクリウス・ポリティクス』の論説は古典的共和主義への傾斜を強めることになるが、このプロパガンダは人民の「同意 (契約) による統治」という、体制の安定化にとって極めて重要な正当性の調達を成し遂げることはできなかった。この点についての詳細は、次項5の「主な発表論文等」欄に掲げた「マーチャモント・ニードムの共和国論：ジャーナリズムのなかの『自由な国家』」で論じられている。

(3) 総括

やや概括的に述べるなら、人民主権 = 信託 (契約) 理論と古典的共和主義を結びつけるためには、1640年代のレヴェラーズと1650年代の共和派 (commonwealth-men) とを繋ぐ政治思想が必要となる。この論点が従来の研究において深く追及されなかった大きな理由のひとつは、レヴェラーズに代表される1640年代の急進主義者がピューリタニズムに由来する自然権 = 契約論に依拠するという認識から、それが1650年代の古典的共和主義を基調にした共和派とは相容れないと即断されていたことにあったと考えられる。この捉え方の再検討が必要と考えた私は当初、1650年代以降にその全容を現す共和主義が、共和制イングランド出現の歴史的文脈において、1640年代の急進主義と古典的共和主義との融合によって形成されたという見通しを立て、その融合がどのような形態と経緯でなされたかをニュースブックの分析によって検証することを目指した。研究の結果、共和国政府の標榜した共和主義が人民の同意論を社会契約のような国家の設立原理ではなく、もっぱら既存の共和国の議会運営の原理として機能させていたことが明らかになった。

しかし、軍事独裁色が強まるクロムウェルの護国卿体制が誕生した1654年、ジョン・ストリーター編集 (執筆) のニュースブック『アリストテレス『政治学』第1巻に関する歴史的、政治的、哲学的考察』 (*Observations, Historical, Political, and Philosophical, upon Aristotles First Book of Political Government*) の論説において、人民主権 = 信託 (契約) 理論と古典的共和主義との見事な融合が果たされた。ストリーターは護国卿体制のなかに共和制の解体と王制の復活を見て、それをこの論理によって批判したのであった。そして本研究は、この新しいイギリス共和主義の理念が1650年代で消滅することではなく、名誉革命を経て18世紀にまで受け継がれるという見通しを立てることができた。この点についての詳細は、次項5の「主な発表論文等」欄に掲げた第18回日本ピューリタニズム学会研究大会 (2023年6月17日、同志社大学) での学会発表「ピューリタン革命期のジャーナリズムに見る政治的急進主義の系譜 : *The Moderate* から *Mercurius Politicus* へ」で論じることが決まっている。

以上、本研究はニュースブックに見出される共和主義の言説を分析することによって、革命期イングランドの共和主義の動態をかつてない明瞭さをもって把握することができた。ジャーナリズムの機能に着目して共和主義の動態を解明せんとした本研究の試みは、共和主義研究の豊かな発展の可能性を広げるとともに、古典的著作の読解に専心する従来の政治思想史研究の在り方に一石を投じるものになったと考える。また本研究はイギリス史やメディア史 (新聞学) にわたる学際的研究であり、ここで得られた知見はこれら関連諸領域にも積極的な波及効果をもたらすはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大澤 麦	4. 巻 64-1
2. 論文標題 ニュース誌『モデレート』（1648～9年）と革命期イングランドの急進主義政治思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法学会雑誌	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤 麦	4. 巻 62-1
2. 論文標題 マーチャumont・ニーダムの共和国論:ジャーナリズムのなかの「自由な国家」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法学会雑誌	6. 最初と最後の頁 55-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大澤 麦
2. 発表標題 ピューリタン革命期のジャーナリズムに見る政治的急進主義の系譜 : The Moderate から Mercurius Politicus へ
3. 学会等名 第18回日本ピューリタニズム学会研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------